医挑む

第1部 寿都から

問題 道立病院の赤字

道立病院は現在、江差、紋別、北見、羽幌に計4カ所の一般病院をはじめ専門病院を含めて8病院。1990年までは13病院があった。4月には紋別病院を地元5市町村の事務組合に移管、7病院になる。公設民営化などによる経営改革も模索しているが、医師不足などによる患者離れ、コスト高などで、昨年度の赤字は総額約16億4千万円に上る。

②「新しい道」

診療存続 導いた一言

「うまい魚が入ったんよ、先生」

2月中旬、後志管内寿都町の運送業宮下登さん(63)から、町立寿都診療所所長の中川貴史さん(34)へ電話があった。宮下さんの車庫兼事務所での小さな飲み会への誘い。漁業などを営む社長さんら5人で音頭をとった。

粉雪の夜、赤々と燃える石油ストーブ。地元産のタラの鍋やブリの刺し身をほおばり、ときおり笑いがおきる。当番で酒が飲めない中川さんはジュースで乾杯。参加した4人の医師は、「地域との一体感」を感じていた。

長靴で駆けつけた片岡春雄町長(61)は、医師を大事にする町民の思いを代弁した。

移管論に反対

「もう、医療崩壊の危機はたくさんだよ」

7年前。道は、道立寿都病院を廃止、町営移管を強く求めた。

当時、道立病院の医師は2人。しかも、小さな町を希望する医師は少なく、次々に交代した。町民との接点は薄く、毎年1割以上の患者が減った。病院の収支は悪化、年4億円の赤字を重ねていた。

住民との飲み会に誘われた中川さん（左から2番目）ら町立寿都診療所の若い医師たち。深夜まで熱く語らった

4億といえば、町の一般会計予算の1割に当たる額。「そのまま引き受けられない」。

片岡町長は、夜間休日の救急と、60あった入院ベッドを全廃する方針を打ち出した。

しかし、近隣の岩内協会病院までは町の中心部から40キロもある。「何かあったら、命が助からない。町営への移管はだめだ」。住民の反対運動が起こり、議論が進まなくなった。

「何としても」

道の要求を拒否すれば、病院自体がなくなる可能性もあった。

「家庭医療という新しい道がある」。片岡町長は、ある道幹部の言葉を、今でも鮮明に覚えている。

内科でもなく、外科でもない、聞いたこともない医療。地域にとけ込み、体と心の問題を何でも診て、初期救急にも対応できる地域医療の専門家という。

「何としても呼ぼう」。町や議会の姿勢は前のめりになった。

2004年9月8日。大型の台風18号が日本海を北上していた。片岡町長や町議、町職員ら20人はマイクロバスに乗り込んだ。

北大のポプラ並木をなぎ倒したほどの暴風の中、目指したのは、家庭医を派遣する北海道家庭医療学センターのある室蘭だった。

連載へのご感想をお寄せください。
▶Eメール iryou@hokkaido-np.co.jp
▶ファクス 011・210・5592